

月刊
JMITU

セガ



長崎平和公園：親水護岸（被爆地層の展示）より
原爆によって破壊された家のレンガ
焼けた土や、溶けたガラスなど・・・

10月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2023年発行

No.466

23年秋闘 年末一時金回答

10月18日、23年秋闘・年末一時金要求に対する会社の回答がありました。

セガ 会社回答

「先日対外的にリリースしているヨーロッパの状況が少しよくない、そこである程度今期は損益がであることを発表している。セガサミーグループ全体としては通期としての見直すという事はない、サミーが好調という事情もあるの
で、セガ連結としてどうなるかというところで見極めが必要、ある程度通期の目標、計画に対してどうかということ」

ろが必要になると思うので、今月一時金について回答は難しい。

諸要求については、それにそのまま答えることは難しいが。基本的には従業員の福利厚生に関する要求という事はわかっている。従業員がより働きやすい安心して働けるようにと環境を作っていくという考え方は会社としては思っている。同じ観点で改善できるものは改善していこうという考え方は変わらない。これまでも変えてきている。」
組合「結婚祝い金については」
会社「結婚をお祝いすることはいいのですが、むしろ家庭

を持つて子供ができて育児を抱えているときに働くサポートを充実した方が良いのでは
と思っ
ています。育児休暇取得での支援金等やっている。」
組合「家族手当がなくなされた支給されていた方たちは制度移行時給料にのっけていますが、これからの人たちは結婚しても子供が増えても手当がない。」

会社「今回の制度変更でなくしたもので、戻すという事はない、家族がひとりいるから2人いるから報酬が変わるというのは時代にそぐわなくなっているのではないか、給料は仕事に対して払いましょ
うとシ
ンプルにそうしたい、もちろん給料で育てているのだけれど40年前は、大黒柱が働いて奥さんが家庭に入ると
いう形でしたが、もちろん今

もそういう家庭もありますが、今は就業のあり方も変わっているのではないか、手当を無くしたというだけでなく、一方で大幅に給料水準も上げてきているので、単純に手当てを無くしたという話ではない。報酬は仕事に対して払っている。属人的手当てがない方が公平ではないか。」

組合「退職金前借については」
会社「退職金前借は想定通り若い人の方が多い、価値観が変わってきている。会社に入って定年までいるという感覚ではない。長く働こうという人でも、退職時にちゃんとももらえるのという不安から先にもらう。50過ぎると退職時にそのままもらえばいいという。選
択できるというのはいいことではなかったのかと思う。」

SLS 会社回答

会社「年末一時金係数2.0、その他の諸要求については検討したが、応じられない。

今回新たに要求された3件の会社からの回答は以下です。災害等による自宅待機や早退・遅刻について、正規、非正規にかかわらず賃金を100%保証すること。については、雇用形態が違うので、ノーワークノーペイという原則支給しないというのが会社の考え方なので支給はしない。

ガソリン価格についても、今の支給額でリッター7キロ以上走る車であれば満たされているので問題ない。

スポット業務等で外部倉庫にて作業した際、外勤手当を支給すること。については基本外勤手当とは別物なので支

給はしない。ただし昼食補助代という事で支給を検討している。

組合「退職金制度について噂では変更を考えているそうだがどのような内容なのか。」

会社「退職金制度については検討している。選択制で社員が不利益になるようなことは考えていない。話せる段階になつたらお話をする。」

セガ、SLSの回答に対しとても納得できるような回答ではないという事で、会社に対しストライキ通告を行いました。

仙洞田一彦

近況を聞くこともせず、いきなり自分の小便の話をするのだから、相当親しい友に違いない。

「俺もそうだった」

友は表情を変えずに答えた。

「睡眠が、細切れだから、朝もなんだかだるくってさ」

言って、私は頭を右に倒し、左に倒しし、今度は回した。凝っているのか、首の根元に痛みを感じる。

何年も会っていない友に、久しぶりに会った夢だ。場所は何処だろう。最寄りの駅前のような気もあるし、そうでないような気もする。とにかく次から次へと愚痴が出て来る。それを聞いてくれる親しい友に違いない。歩きながら話している。駅前からどこかに向かっているのだ。

「いやあ、最近は何度も起こされてね。小便が近くなって困る」

「目もダメになった。飛蚊症

「俺もそうだったよ」

友はすぐに答えた。

「俺のはね、蚊というより目の玉に糸くずがついているような感じなんだ。煩わしくってしょうがない」

私の言葉に、友が二度背く様子が見えた。そして友が言った。

「早く眼科に行った方がいいぞ。ほっといてもいいやつと、ほっとくと失明するのがあるらしい」

「行った、行った」

私は答えた。友がまた言った。

「白内障の手術は」

「やったよ。俺は早かった。六十代だ。あんたは」

「俺、俺はやらなかった」

私は思わず、聞き返した。

「やらなかった？」

「ああ」

友が答えた。やってないなら「まだ」が答えではないのか。過去形はおかしい。疑問そのままに話題を変えた。

「歯もダメだ。総入れ歯まで、間もなくかも知れん。固いものはだめになった」

「俺も、歯は早くダメになったな」

友が言った。何となく自分の方がましのような気がして、優越感を持った。

「噛めば噛むほど味が出るなんてのは若いうちだな。噛むと痛くなって、口から吐き出してしまうものな」

友が言った。

「ああ」

私は答えて周りを見た。時

間が経っているはずなのに、まだ駅前広場から出ていないような気がした。だが、気にはならなかった。

「最近な、口が乾くんだよ。いまもガムを噛んでる」

私は友の方を見て、唇の間に挟んだガムを見せるようにした。友はチラッと視線を向けたが、すぐに前を向いてしまった。それはそうだろう、いくら親しくなったって見たくないだろう。それとも関心がないのか。ガムを口先から、中に戻した。また友を見ると、顔を前に向けたまま笑みを浮かべた。関心がないわけではないようだ。

「テーブルの端や、椅子に体をぶつけるんだな。若いころは意識しないで部屋の中を動いていたって、そんなことは

なかったのにな。年を取ると自分の手、体の幅感覚のようなものなくなるのかな。だからテーブルや椅子に近づきすぎて、手をぶついたり、足をぶついたりするのか」

私の言葉に、友は顔を私の方に向けて言った。

「俺はなんでもないとこでつまずくんだよ。つまずいて、振り返って床を見たって凸凹はない。かすかに波打ってはいるけどな。足が上がってないんだな。自分では足を上げているつもりでも十分じゃない。人間の目は見ていないよ。うで見ていて、危ないと思えば自動的に体が動いて避けてくれる。若いうちは手や足の動きが十分なのに、年取るとその動きが十分じゃない。だからぶついたり、つまずいた

りするんだよ」

「へえ」

友の説明に、私はわかったような気がして肯いた。だからか、友に質問した。

「病院の受付で若い女の言葉に絡んだり、コンビニのレジで若い店員に意地悪な質問したりする。何か言いたくなるんだよな。本当は自分の耳が遠くなつて、聞き分けられないだけだな。相手のせいにして『よく分かるように説明してくれ』なんて、絡んでな」

すると友は、笑って言った。

「一人暮らしだろ、寂しいんだよ。話を聞いてくれた相手も少なくなってきたしな。相手にしてもらいたいから絡むんだ。だから年寄りには、余計に嫌われるんだよ」

友は言いながら、笑い声を

さらに大きくした。私は首の後ろを掻きながら言った。

「もう先がないんだな」

すると、友が言った。

「弱音を吐くんじゃない。俺なんか両足を棺桶に突っ込んでるんだぞ。生きてるだけ、まだましじゃないか」

両足を棺桶……私が話していたのは誰だっけ。友の方を見た。友の姿は消えていた。先に逝ってしまった友で、こんな会話をできるのも三、四人いたな。誰だろう。

「××さん。さ、おむつ変えましょうね」

耳元で、女のかい声がした。あれ？ 私の名前だ。

目が覚めた。パジャマの首回りには汗でぐっしより。あわてて股に手をやった。